

# Newsletter

December 2005

<http://www.aack.or.jp>

目次

通える夢は崑崙の……	伊藤 寿男……………1
—崑崙山脈未踏峰(六三四五m)登頂— 岩瀬との約束	
五三年前の厳冬期知床遠征をふりかえって(その二)	
本隊の行動	斎藤 惇生……………5
AACK人物抄	
田中喜左衛門さん	
(一八七七・明治九年〜一九四三・昭和十八年)	平井 一正……………8
ポリビア・アンデスの山旅(その二)	阪本 公一……………12
第九回「岡山のを登る会」 (駒の尾山・船木山・後山の山行記録)	潮崎 安弘……………17
日本山岳協会・山岳共済(一般共済)の案内	……………18
AACK海外登山・探検助成制度の案内	……………19
訂正	……………20
編集後記	……………20

## 通える夢は崑崙の……

伊藤 寿男

### —崑崙山脈未踏峰 (六三四五m) 登頂

本年八月一日、平均年齢六一歳の熟年登山隊が、崑崙山脈の六三四五mの未踏峰に登頂した。登山期間は七月一四日〜八月一〇日。隊の構成は、伊藤寿男隊長(六六歳)、前田栄三副隊長(六一歳)、泉谷洋行(六一歳)、栗本俊和(五六歳)から成る。

詳細な報告は、AACKホームページに掲載したのでこれをご覧下さい。

### 対象の山

タクラマカン砂漠の西南端の町イエチエンを起点に、チベットのラサまで「新蔵公路」が通じている。この「新蔵公路」を使ってイエチエンから約五三〇キロ南下し、ここで公路を離れて東に、砂漠の中を直線距離にして約一六キロ入った地点にこの山のピークがある。右折する広大な谷間の奥に鎮座しており、残念ながら「新蔵公路」からこの山を見ることは出来ない。

崑崙山脈の未踏の山を登るというのが我々の長年の夢であった。

ヒマラヤやカラコラムといったポピュラーな山群でなく、「崑崙」という響きがなんとなく東洋的で、シルクロードを彷彿させる。さらに、三高寮歌にも詠われていて歴史とロマンを感じて学生時代から憧れてきた。

崑崙山脈の中から、我々の年齢と体力、そして技術力に見合う山を見付けるために、昨年九月にこの地域に入った。(昨年のAACKホームページご参照)

六〇〇〇m以上の山であること、ポッカ不足を補うため出来るだけ高所まで車で入れること、難しい登山技術を要しないこと、そして何よりも「白きたおやかな山」であること、という我々の条件を満たしたのがこの山であった。

### 行動記録

以後一年間、日本の山でトレーニングに励む。筑波大学での低圧室で最後の仕上げを行なった。

熟年登山隊であることを念頭において、タクテック面も念入りに検討した。固定観念を捨て、BCをテストではなく「招待所」にしたのも検討の結果であった。結果的には、これが、全員、元気一杯、同時登頂と



ユメ ムスターク (6345 m)  
撮影：栗本俊和会員



頂上にて 撮影：泉谷洋行会員

いう成果につながったと思う。  
「招待所」は、バラックにベッドを置いただけの粗末な簡易宿泊所だった。最初は、こんなひどい所がBCかとの印象だったが、時の経過と共に、屋根付き、お湯付き、自由な空間付きという環境が、まさに黄金の御殿のように思えてきた。この御殿でゆったり静養

を駆って六日目である。途中三三〇〇m、四九〇〇mの峠を三つ越え、じつくり高度馴化をしながらのBC入りであった。  
ABC(五四四〇m)は、四輪駆動車の最高到達地点に設けた。「新蔵公路」から離れ、砂漠の中でのスタックを心配したが、時期も幸いして、我々の四輪駆動車はよくここまで上ってくれた。ABCからは、我々だけによる登山となる。人力、馬、ロバ、らくだなどの手配は、地理的に困難なのだ。  
昨年の最高到達点五八〇〇mにC1を設ける。ここから上部はピッケルとアイゼンの世界である。C1をベースに更に六一二〇mまで登り上部を偵察した。その結果、ピークまでのルートが明確に指摘出来た。ピークは見えないが、白いプラトートの奥に控えているのであろう。雪稜を辿れば、スノーバー、フィックスロープなど使わずに何とかピークに到

し、英気を養うことが出来たのである。

BCである大紅柳灘(四二六五m)に着いたのは、成田を発つて、ジェット機を乗り継ぎ、四輪駆動車二台

達出来そうだ。ルートを確認後、予定通り、全員BCに下り一日半の静養をする。  
BCで十分静養し体調を整えた後、C1に入り、次の日、六〇一〇mにC2を設営してここに泊まり翌日のアタックに備えた。

#### アタック

八月一日、曇天、風やや強し。珍しく頂上には雲が流れ飛んで見えない。

アタックの緊張感はない。雪はくるぶしが入るくらいで言うことなし。栗本がトップでどんどん登る。ルートは山の左側の大カールの上縁りを辿る。左のスカイラインをなしている尾根とのジャンクションの下の、急な広い雪面で、前田がトップと入れ替わる。彼は小気味良いステップでジャンクションを指す。大いに楽しんでくれ、ここに至るまでの数日間、相應の働きをしてきたのだから。

ジャンクションは風とガスの中。ここからはなだらかなプラトートとなって頂上に至るはずだが、ガスで何も見えない。広い雪面を、前田は右側、私は真ん中、泉谷、栗本が左側から、風とガスの中をひたすら高みを目指す。下から見た頂上とおぼしき岩群を右に過ぎても頂上の高まりが無い。頂上を踏めるという興奮の為か私はまったくしんどさを感じない。

突然右側の前田から「伊藤さん、その先は落ち込んでから注意してください」と声が掛かる。ガスの中確かめると前後左右ここより高いところは無い。頂上であった。

私は、頂上が広げればこうしようと皆に話していた通り、一番高いと思われるところに

ピッケルで直径1mの円を描き、「アインス、ツバイ、ドライ！」で皆で円内に足を踏み入れた。

午前一一時〇五分、全員同時登頂の瞬間であった。

「エイ、エイ、オーツ！」の儀式の後はお互い抱き合い、肩を叩き合って初登頂の感激に浸る。

ガスが途切れだし、薄日さえ差すようになってきた。白き山々が累々と、果てしなく連なる崑崙山脈が現れた。その巨大さに圧倒され、畏怖の念さえ覚える。私は、日本から大事に持ってきた岩瀬時郎君の遺影を取り出して、周りの景色を見せた。かつて彼と志が同じことが分かって以来、共にこの頂きを目指して準備をしてきたのだった。三年前、彼が大菩薩峠の登山口で急逝するまでは。(AA CK ニュースレター No.24 2002 May へ参照)

三五分ほど余韻に浸った後下山を開始した。ザイルは不要とはいえ、スリップしたらひとたまりも無い。慎重にC2まで下り、これを撤収、一五時二〇分に無事にC1に着いた。ここからはアイゼンも不要の通い慣れた安全なルートである。もう安心である。泉谷とガッチリ握手を交わす。彼のこの一年間の鍛錬は目を見張るばかりであった。昨年、この場所に息も絶え絶え辿り着いたのだった。

(注) 文中の高度は伊藤の高度計による。

## 下山

翌日、C1撤収、ゴミも当然の事ながら全て持って下りる。各自開放感に浸りながらマイペースでのんびり下りた。ABCで出されたカシユガル瓜の美味かったこと、高山病のピークであった先日と違って貪り食う。ABCを、来た時と同じように綺麗にした後、車に乗る。心地よい疲労感に身を委ねながら砂漠地帯を一路BCを目指した。

この日は一気に三十里営房まで下りた。げんきんなもので私のSpO<sub>2</sub>は八八に回復し、猛烈な空腹感に襲われた。

三十里営房からも車は順調に走ったが、クデイの関所で、軍隊の車両が二〇〇台通過するまで待てとストップさせられる。これが三々五々通過するため一〜二日のクデイ停滞を覚悟するが、通訳バトルの機転と頑張り、我々のみ通過を許可された。ここが国境近くである事を痛感する。

暮れなずむアカズ峠から崑崙の山々に別れを告げ、夕闇迫るタクラマカン砂漠に向けて下り始めたとき、長年の夢であった私の「崑崙」が、いま終わりつつあることを実感した。

この後、カシユガルで、カシユガル山岳協会会長のケヨン氏と会った。彼は、我々に登頂証明書の発行を約すと共に、我々の希望を容れて、山名を「YUME (夢) MUZTAGH II ユメ ムスターク」と名付ける事に同意した。同協会から近々登頂証明書の送付があるはず

である。

## 登頂出来た理由

- 一 見付けてきた山が、たまたま丁度我々熟年向きの山で技術的にさほど困難な山でなかったこと。
- 二 时期的にも良かった。天候にも恵まれた。一度も寒いと感じた事は無かった。
- 三 固定観念を捨て、BCをテントではなく接待所に設けたことは、肉体的、精神的に変容であった。臨機応変にC2を設置したのも良かった。
- 四 合計二日半の休養日も含めて高度馴化には十分に意を用いたこと。
- 五 小規模遠征として四人編成は最適であった。

## さいごに

今回の遠征は、国内の個人山行の延長といった意識で、それほど身構えずに気軽に出かけたものである。この身軽さ感覚の所以は、我々がAA CKの中で育ってきたからだと思う。こと崑崙についてみても、先輩諸氏の記録が山ほどあるし、ちよつと京都に電話して崑崙に行ってきた人の話をじかに聞いたりすることも出来る。AA CKにいるお蔭で、遠征とか、崑崙とか、世間では浮世離れた事象が、ごく身近に存在する環境の中にいたからだと思う。AA CKの有難さをつくづく感じた遠征であった。

今後、大規模な学術遠征隊を出すのでもいいが、我々のような、気の合った者同志の、私

的で質素な小規模貧乏遠征隊がどんどん出てきてもいいのではなからうか。

最後に、ドクター不在のわが隊において、貴重なアドバイスや効能リスト付きの薬品の数々の存在が、どれほど心強かったことが、斎藤Y先生に改めて御礼申し上げます。

また山岳共済の導入にご尽力下さった木村会長や吹田啓一郎氏、現在もまだボランティアで山岳共済の窓口をやって下さっている阪本公一、堀内 潭の両氏（特に阪本氏には、保険のみならず今回の遠征について真摯なアドバイスを数々頂いた）、面倒な留守本部を快く引き受けて下さった田中昌二郎氏、貴重な情報を提供戴いた新井 浩氏、二月の八ヶ岳で氷壁技術を指導して下さいました睦好正治氏、筑波大学低圧室でのご指導賜った浅野、西俣両先生と学生諸君、その便宜を図って頂いた安仁屋政武氏、その他今回の遠征でお世話になった多くの皆様、特に、我々を快く送り出してくれた職場の皆様、そして愛する家族達に深甚の謝意を申し上げます。

併せて、故岩瀬時郎君のご尊父から我々に賜ったご寄附を、「岩瀬基金」と名付けて、共同装備、その他の購入に有難く活用させて頂いた事もご報告申し上げます。

## — 岩瀬との約束

本稿は、「ニュースレター No.24 (May 2002) — 岩瀬時郎君追悼特集」の続編のつもりで書いた。岩瀬時郎君について知らない人

もいるだろうが、AACK関東会を今日有らしめた偉大なる功労者であったと理解して頂きたい。文中「岩瀬」と呼び捨てにしているが、彼は私より一年下、ほとんど同期生のようにつき合っていて、いつもこう呼んでいたからである。

.....  
「岩瀬よ。これが君の憧れていた崑崙だ。やはりとてつもなくデカイな……」

本年八月一日午前一時五分、伊藤、前田、泉谷、栗本の四人そして岩瀬の遺影が、崑崙の未踏峰六三四五mの頂きに立った。

頂上は雪に覆われていて思ったより広く四人同時に頂上を踏んだ。恒例の「エイ エイ オーツ」の雄叫びをあげてセレモニーは終了。後は、抱き合い、肩を叩き合い、握手をし合って初登頂の感激に浸った。

頂上付近はガスに包まれていたが、次第に風で吹き飛ばされ、周りの光景が現れ始めた。やがて薄日すら差し始め、崑崙山塊の白く大きな山々が遙か彼方まで累々と連なっているのが見渡せた。

私は、昨夜アタックザックの中に入れておいた岩瀬の遺影を取り出した。三年前の「岩瀬時郎君を偲ぶ会」の際に、小林バコヤシ君に焼き増ししてもらった大きな写真である。卒業後も彼とはよく山に行った。これは岩瀬と二人で利根川源流をつめた時のもので、真っ暗な長い雪溪の下を潜り抜けて、ヘッドライトを点けたまま、びしょ濡れ姿でタバコを

くゆらせている、とてもいい写真である。彼にじっくりと崑崙の三六〇度の大パノラマを見てもらった。この光景を彼はどれほど憧れていたことだろう。これが冒頭の一節になる。

本来なら彼もここに立っているはずであった。彼と志しと同じであることが分かって以来、共にこの頂きを目指して準備をしてきたからだ。三年前の二月、崑崙遠征に備えて訓練のため出掛けた大菩薩峠の登山口で彼が急逝するまでは。

（この件の状況については、上記「ニュースレターNo.24 May 2002」に詳述されている）

彼は崑崙遠征のためもあったと思うが、定年一年前に新日鉄を辞めた。以後急逝するまでの二年四ヶ月、憑かれた様に崑崙に打ち込んでいった。敬服するのは、彼はほとんど独力で突き進んでいったことである。富士山、玉山、カムチャッカのクリチエフスカヤ山とグレードを上げていき、ついには、単独で崑崙へ偵察に出掛けていった。崑崙で買ってきた干し葡萄と羊の乾燥肉をかじりながら、彼の土産話を聞いたのがついこの間のようである。亡くなる三日前に、「この夏の遠征スケジュールを作ってみました。ファックスします。」と、嬉々として電話をくれた声が耳に残っている。

前掲の「ニュースレター 岩瀬追悼号」に寄せた私の追悼文の末尾はこう結んでいる。

「……この崑崙遠征計画は岩瀬の遺志を継いで何とか実現したい。その時は岩瀬よ、一緒に登ろうな。……」

今回の遠征の前半は、私の体調は昨年と同様に比べ、あまりよくなかった。十二分に注意した積りだが高山病になってしまった。アタック直前にBCで一日半の休養をとることになっていた。そしてBCに下りた時点で是最悪の状態であった。私は、この一日半の休養で回復しなければ、皆の足を引っ張るので登頂は諦めると宣言した。背水の陣の心境であった。この日の日記の最後にこう書いている。「岩瀬よ、俺を護ってくれ（原文どおり）」。この念が通じたのか一日半の休養後は、物は食えなかったが体調は回復し、C1で泊した後C2まで登れた。



故岩瀬時郎会員の写真とともに  
撮影：栗本俊和会員

アタック前夜のC2において、睡眠前に「明朝目が覚めたらまた高山病をぶり返していたということが無いように」と再び岩瀬に頼んだ。アンデスでもキリマンジャロでも熟睡した翌朝、目が覚めたら高山病になっていたという苦い経験があったからだ。

アタック日の朝、すっきりと目覚めた。快調である。岩瀬の加護を感謝した。頂上までも順調で、BCに下りた日の不調が嘘のようであった。この五日間食欲が無く、食うものも十分摂っていないにも拘らず、この体力が残っていたのが不思議である。岩瀬が登らせてくれたのであろうか。

岩瀬の遺影は頂上に埋めずにそのまま持ち帰った。初めからその積りであった。あんな寂しい所に置いてくるわけにはいかない。

帰国後、残暑の日差しがまだ強い日、千葉に在る岩瀬の墓前に遠征の報告に行った。隊員全員が登頂し無事に帰国出来たことを報告すると共に、彼が、我々全員を見守ってくれたこと、そして私を未踏の頂きまで押し上げてくれたことに心から感謝の意を表してきた。

この墓前の報告を以って、私は岩瀬との約束を果たしたと思っている。

## 五三年前の巖冬期知床遠征を ふりかえって（その二）

### 本隊の行動

斎藤 惇生

隊は四隊に分けられた。第一隊は岬隊、第二隊は山口、斎藤、平井、第三隊は広瀬、中川、寺本、第四隊は杉山、川瀬、隊長の編成だった。

二月一六日（曇後晴）、合（相）泊で船からの荷上げ完了は一二時四五分、子出藤（ねりふじ）さんの番屋の二間を借りて落着く。棟続きの温泉は少しぬるいが快適なベースハウスだ。午後、杉山、広瀬、中川は偵察に行く。他は荷物整理。夏の偵察の登路の北カモイウンベ川と南のカモイウンベ川の中の尾根を登る。二〇〇mの高度までトレースして帰る。

二月一七日（雪後晴）、全員でC1設営に行く。尾根は二〇〇mぐらいより急になる。稜線に出て四五〇mぐらいのタンネの林の中にC1設営、タンネの葉を敷いて六人用のウインパー型テントを立てる。居住性は最後まで良かった。第三隊が残り二、四隊は下る。

下る時隊長が転倒した拍子にスキーが外れて流れた。平井がサーと飛鳥のように滑って掴まえた。スキーはベンド部が折れた。隊長のスキーは戦前あった愛宕山のスキー場の貸スキーの払下げだった。汽車のなかで隊長



全隊員12名勢揃い。第一次計画終了時。合泊BHにて

はくたびれたシールを修理していた。所々毛が抜けていた。隊長は尻皮の犬の毛を切りとって毛並を逆さに縫付けていた。みなそんなので大丈夫かと顔を見合せたが本人は全く平気だった。結局そのシールでC2まで登ったのだから十分役に立ったのだろう。  
スキートの折れたところから海岸までたいへんだった。歩けば熊笹にもぐる。スキーをはいの階段下りも四苦八苦だった。

一二月一八日(晴後吹雪)

C1の第三隊は朝テントから首を出すと無風快晴、C2建設へと出発したがたちまち天候悪変し吹雪となる。高度八〇〇mまで登り資材デポ。スキーを快調に飛ばして昼過ぎにC1帰着。二、四隊はBHより荷上げ。隊長は朝スキーを修理して参加。第二隊はC1に残る。この日より隊長は二隊、平井が四隊に変わる。

今日のような妙な天気の変りをこの辺では榛(はん)の木天氣というそうだ。つむじ曲りの人も「あいつは榛の木だ」という。木の幹がくねくねとひね曲っているところから来たらしい。

一二月一九日(雪)、降雪がひどくC1の二、三隊沈没、歌を歌い、一台だけのラジオを聞いて過す。ここでは日本の放送も聞けるしソ連の音楽放送もよく入る。唯一の文明社会とのつながりである。四隊は気がすすまなかったのだがと云いながらBHよりC1へ荷上往復。

一二月二〇日(吹雪)、天候は思わしくないが二、三隊はC2設営に出発。一八日のデポ地より上は急傾斜が続く。吹雪がひどく地形が判然としないが、高度一〇〇〇mぐらいの傾斜のややゆるい所にカマボコテントを立

てる。下を掘ると這松が出てうまく水平にはれなかった。このため居住性は最後までよくなかった。三隊が残り二隊は吹雪のなかをC1へ下る。四隊はBHでオフ。

一二月二一日(晴)

C2はC1より五〇〇m高いが恐ろしく寒い。今朝は珍らしく素晴らしい快晴。第三隊の広瀬、中川、寺本はC2より風でよく締った雪を踏んで真直ぐに上に登る。三〇分で極地のように広々とした主稜線に出る。這松にエビのシッポがついて起伏を作り歩きにくい。夏の偵察の時に到達した一一〇二mのピークを東に捲きコルに出るとやせ尾根になる。ポロモイ台地の少し手前まで行き、岬隊収容のための備えにカマボコテント、食糧、燃料若干デポする。平坦な広い台地に赤旗を一五mおきに設置。尾根のジャンクションのところで第二隊とともに上ってきた隊長と依田カメラマンに会う。隊長と依田はC2に残り山口、斎藤はC1に帰る。

私の山の入門は熊本の旧制五高山岳部で阿蘇の鷲ヶ峰の岩登りだった。学制改革で一年で京大に入り、山岳部員にもなったのだが教養から医学部受験があった。そのためスキーを習ったのは医学部一回生の冬笹ヶ峰合宿で、中島道郎に全くのイロハから教えてもらった。知床は次の年だった。

そのころのスキーはシュテム系で、山ではシュテムボーゲン、それに枝制動、股制動も重要な技術だった。縮具はカンダハーで下りは前傾バンドで足首固定、転倒してもスキーは絶対外れない。シールは取付で古くなると

よく外れた。

私は靴は村上で新調、シールも金をなんとか工面して新品を買った。おかげで登りは全くスムーズだった。しかし下りは一年前に覚えればかりの技術ではこなせずよく転んだ。知床の雪は海に近いため北海道の粉雪でなく湿雪で重かった。二年目でそんなつっぱりスキーをしたら身についてしまつて、一生スキーは上達しないだろうと藤田陸奥磨が後で予言した。残念ながら予言はあたって五〇年たつても会心のスキーはしたことがない。

#### 一二月二二日(吹雪)

猛烈な風と雪とガス、C1、C2文句なしの沈澱、しかしB日からのボッカばかりしていた第四隊は、知床岳冬期初登の任務も与えられていたので、榛の木天気で好くなるかも知れぬと出発し、九時一五分にはC2に着いた。しかしその後は立つてもおれない猛吹雪になり、C2に泊りこむことになった。六人用テントに八人(三隊三人、伊藤、依田、四隊三人)でぎつしり、シュラフは五個、吹雪はテントをゆさぶり続け寒さはきびしく、八人は折り重なるようにしてウトウトしただけだった。

一二月二三日(吹雪)、夜が明けても吹雪は物凄さを増してきたと記録されている。狭く窮屈でたまらないので、四隊の杉山、川瀬と依田の三人は半ば追出されるように下りることになった。位置もしつかり分らずトレースもすぐ消えてしまい、自分のスキーが動いているのか止まっているのかも判らない猛吹雪のなか、一瞬うすくなったガスをすかしなが

ら下った。普通なら一時間で下れる所を、三時間半もかかってC1に着いた。三人ともスキーの天狗揃いであった。それで無事に下りれたのだろう。依田はC1に泊らずB日に下りて行った。

#### 一二月二四日、(吹雪)

各テント共オフ。一日中山の歌、旧制高校の寮歌を歌って過す。山口に三高山岳部愛唱の「キキラン」、「野沢小唄」、「守れ権現」、など習う。

知床での食事は、行動日の朝は $\alpha$ 餅、沈澱日は乾パン、スープ、昼は乾パン、マーガリン、チーズ、間食は甘納豆、ドロップス、夜は乾パン、固形ルーを削りカレー、ハイシ、ホワイトスープのくりかえし、札幌で買った雪印のニンニク入ソーセイジかベーコンを一人前二二g、マーガリン一〇g、乾燥キャベツ、ポテトを適当に入れた。そして粉ミルクに砂糖を入れて飲んだ。昼間は米軍放出のレモンパウダーを溶かし人口甘味料シロゲンを入れて甘くしたのが主だった。酒類は全く無かった。京都で準備中から体調保持のため禁酒令がしかれていた。ビタミンの補給にパンビタン一日二錠服用。カロリーの計算では行動日は三〇六〇、沈澱日は二四四五Kcalであった。蛋白質は計算では八〇gだったが、動物性蛋白質は不足していた。しかし予算的にこれ以上の準備はできなかった。

#### 一二月二五日(曇、ガス)

やっと雪が止んだ。C2の第三隊はテントの入り口が雪で埋っていて、中から掘り出して這い出る。ごそごそしているうちに第二、

四隊が登ってきた。斎藤、平井は雪に埋った荷物の整理に残り、第三隊三人と山口は主稜線まで行き、飛ばされたり埋もった赤旗を補修し引返す。この一〜二時間後に岬隊は到達し、シュプールと赤旗を見付け明日は必ず本隊に会えると安心してテントを立てたのだ。

第四隊の杉山、川瀬は一一時C2を出発、知床岳の冬期初登へ向った。主稜に出たがオホーツク海側からの暗雲に閉ざされて主峰は見えない。東峰へ直登しナイフリッジを西へ進む。オホーツク側は断崖で切れ落ちている。ピークを二つ越してスキーをデポし更にピーク一つを越して一三時最高点に達した。少し西方向に行つて傾斜が急に下つていることを確認した。C2を経て一六時C1に帰着した。隊長もこの日C2からC1へ下った。

#### 一二月二六日、二七日(吹雪)

天候またまた悪化、二日間猛吹雪が続き動けない。日が暮れると雲が切れて月が照つたりする。全く人を馬鹿にしたような天候である。岬隊の食糧も燃料もつきかけているころと思うと気がでない。

C2のテントは大型のカマボコテントだった。風にも強く居住性も良いのだが、内側に氷が張りついてきて寒さはきびしくこたえた。吹雪のときの排泄には困った。大便を外に出して尻をまくる勇氣はさらさらない。尻が凍傷になるかもしれぬ。乾パンの高さ二〇cmぐらいの四角の空缶に、径一二cmほどの丸い蓋があった。蓋を外してそれに尻を出して坐ると洋式便器になった。みなをシュラー

フに潜りこませてから排便する。便はしばらくすると氷り、振るとカラカラと音がして不潔感はあまり無かった。捨てるのも楽だった。夜は持っているものすべてを着こんで寝た。靴下の間に桐灰の懐炉を入れないと足が冷たくて眠れなかった。

一二月二八日(雪)

風はないが雪が静かに降っている。視界は良い。広瀬、中川は連絡にC1に下る。第二隊の山口、斎藤、平井と寺本が主稜線に登る。九時四〇分、主稜線上やせ尾根の手前のコルまで来て、ポツンと立っている青いテントを発見した。真先にスキーを飛ばした寺本が「おい、生きていたら返事をしろ」と叫びながらテントに飛びこんで感激の握手をしたのだった。

このテントは脇坂が考え研究したもので、ヒマラヤの強風にも耐えることを主目的に設計された。生地はナイロンは東洋レーヨン提供、ビニールコーティングは丸山工業、厚くなった生地の縫製は一澤帆布の苦心作であった。少し重くて畳みにくかったが、風は通さず氷もつかず岬隊はテントの中では安全だった。

寺本、平井が報告にスキーを飛ばしてC1に行く。二人とも今でもこれまであの時ほど速く快調に滑ったことは無かったと言っている。C1では隊長以下広瀬、中川、杉山、川瀬が対策を協議中だった。一、一時に下りてきた寺本、平井が勝報を告げると、一同テントより飛び出す。隊長は靴もはずさず雪の上で踊ったそうだ。広瀬がすかさず京都へ帰ったら隊員にビールを二杯づつおごる約束を取りつ

けたのはさすがだった。疲れはてた第一隊はみなにガードされて、暗くなつてC1に着いた。

一二月二九日(吹雪)

第一隊は隊長とBHに下る。C1、C2とも吹雪のため沈澱、C2の山口、広瀬、杉山、斎藤の仕事はポロモイ台地のデポの撤収なのだが動けない。食って歌って寝て暮す。

一二月三〇日(雪後晴)

C1の中川、平井、寺本、川瀬はラッセルに苦しみながらC2へ登る。杉山、川瀬、中川、平井はC1へ下る。海岸のためか雪が重く、下りでもスキーが滑らず上りと同じぐらゐのラッセルを強いられる。

昼から晴れたので撤収に出かけるが主稜はガスとラウヘンで視界全く無く引返す。次の計画のことがあり、隊長はデポの放棄を決定した。

一二月三一日(吹雪、時々晴)

撤収を手伝うため、藤村、中島がBHを五時半に出発してC2へ来た。そしてデポ放棄撤収の隊長命令を伝えた。デポのカマボコテントが惜しいのだが仕方がない。C2のテントの内側には一、二cmぐらいの水が張りついている。根気よく落して畳んだが、高さも嵩も三倍ぐらいになっている。スキーのうまい藤村、中島が担いで滑ったがすぐに転倒し起き上れない。どうなることかと思っていたら、山口がスキーにシールをつけ担いで歩き出した。そしてキックターンを着実にくりかえしてゆつくり下って行く。みな啞然として山口の濫いひねた山の技術に驚いたのだった。こ

うして何とか日の暮れるころ既に撤収されたC1跡へ着き、重いテントなどデポしてBHに向う。途中C1を撤収した重荷でふらふらになっていた脇坂、杉山、中川、平井に追いつく。一緒にBHに辿り着く。海岸沿いの三〇分ばかりの道が、疲れきった身体にはなんとも遠く長く感じられたのだった。

BHでは久しぶりに温泉に入り、子出藤さんの好意の餅をたら腹食べた。シュラーフも乾き、悪天吹雪に苦闘した第一次計画の無事成功に満ち足りた気分であくく熟睡したのだった。

一月一日(雪)

藤村、山口、中島、広瀬、川瀬の五人がC1に昨日置いてきたC2のテントなど下しに行く。報告には、「どういふわけか今日はテントがあまり苦にならない。何度も交替できる。中島はC1の少し下の大斜面を直滑降でぶつとばす有様、暢気なスキーツアーの様だった。」と書かれている。これで第一次計画は完全に終了した。

## AACK人物抄

田中喜左衛門さん

(二八七七・明治九年〜一九四三・昭和一八年)

平井 一正

名誉会員田中喜左衛門(以下敬称略)は、AACKの創設にも関与し、カブルーやK2

計画の財政的な後ろ盾でもあり、A A C Kの歴史にとって重要な人物である。しかし現在の会員のほとんどが田中がどういう人物であったかを知らない。今西らの年代は田中とよく山行きを共にしている。お互いが触発してスキー登山も盛んに行われた。ジャコのおかずを今西らはジャコエモンとよんでいたが、四手井靖彦によるとそれはキザエモンから来たものだそうだ。このようにいろいろとA A C Kには縁の深い田中をここに紹介する。

## 一、今西らとの出会い

田中は一八七七年（明治九年）、六月一日、京都下京区七条油小路通りの大きな醤油屋の相続人として生まれた。もともとは物集女の庄屋であり、この家は広大でテニスコートがあったときく。田中が五〇歳になった一八年（昭和三年）に、田中は隠居し店をたたんで



下鴨（今西錦司宅の近所）に移り住み、亡くなるまでここに住んだ。当時は下鴨は愛宕（オタギ）郡下鴨とよばれ、たいへんな田舎であった。店は番頭に別店をもたせ、ここで醤油の販売をやっていた。隠居後田中の登山は拍車がかかり、多くの足跡を残している。（ちなみに田中の生まれた七条油小路は、七条油小路の変という名で知られる新撰組最後の死闘を演じた場所でもある）

日本山岳会の入会は一九〇八年（明治四一年）で、番号は一四六番である。A A C Kとの接点は、今西錦司、桑原武夫らの世代であるが、年齢差も三〇歳近く、いつどういう経緯で知り合ったのか、不明である。今西も、「くわしいことはよく覚えていない、多分大町あたりで噂を聞いたのであろう」と書いている（文献一）。冠松次郎が黒部の平より下流を重点的に探っているときに、田中は平より上流を精力的に歩いている。そしてその数々のエピソードがガイドによって語られるのを聞いた今西が、田中の存在を知った。そして今西らが、山の講演会を計画し、そこに田中を引っぱり出そうとしてお願いにあげたことがある。これが田中と知り合ったはじめであろう。「出てこられたのは、ごま塩あたまを二分割りにして、近眼鏡をかけた、中背のおやじさん、その願いならお断りします、とつっぱられて、取り付くしまもなく帰った」とある。講演は断ったが、それ以後、田中は今西らのグループと多くの山行きを共にし、最後にはヒマラヤも計画するところまで行ったのである。

ただ田中は酒を飲まず、愛宕山の頂上で水とまがって酒を飲み、下山に難儀したという逸話がある。酒飲みの今西らとどういう過ごし方をしていたのか、興味あるところである。

## 二、田中の山歴（文献二）

田中の山歴が克明に書かれたノートが、次男俊一（京大教授、仏文学専攻）によって発見され、今西がそれを紹介している。現物は私も拝見したが、始めから終わりまで、きれいな字で、B6版のノートに丹念に書き記してある。ただ同行者の氏名がないのですこしさびしい（コピーは筆者保持）。少し長くなるが、貴重な記録なのでそれを紹介しよう。

一九〇九年九月 富士山

一九一一年八月 立山

一九一五年七月八月 白馬岳、鍾岳

一九一六年七月八月 烏帽子より槍ヶ岳、

上高地、乗鞍岳

一九一七年七月八月 針の木峠―五色―立

山―劔―小黒部―祖母谷

―清水尾根―白馬

一九一八年三月 徳本峠―上高地―中尾峠

―蒲田（スキー、関西ス

キークラブ）

一九一八年七月八月 籠川入り―蓮華岳よ

り後立山縦走―白馬岳ま

で、上高地―前穂―大喰

一九一九年八月 西山温泉―農鳥―北岳―

仙丈―北沢峠

一九二〇年五月 上高地―前穂岳試登

一九二〇年七月 高瀬入り―千丈沢―左俣

岳―双六―雲ノ平―薬師

沢出合―上廊下―平―針

ノ木

一九二二年三月 白骨温泉―安房峠―平湯

―平湯峠―高山(スキー)

一九二二年八月 立山室堂―平―内蔵の助

沢廻行―立山川

秩父金峰山

一九二四年九月 北沢小屋―仙丈岳(スキー)

―西堀、桑原らと。このとき桑原らは積雪期北

岳初登頂をしている)

一九二五年七月八月 西沢峠―笹ヶ岳―樺

島―赤石岳―小渋川(今

西、西堀、四手井らと)\*

鉢伏山―有峰―太郎平

一九二六年四月 薬師岳―大多和峠(スキー)

―)

一九二六年九月 宇奈月―十字峡―東信歩

道―平―ザラ峠

一九二七年四月 笹ヶ峰―金山―焼山―火

打―関温泉

一九二七年八月 片貝川南又―毛勝―赤谷

山―池の平―別山越

一九二八年五月 和田川―有峰―太郎平―

槍―上高地―徳本峠(スキ

ー)

一九二九年四月 取立山―白山温泉―白山

(スキー)

一九二九年八月 尾上郷川廻行―別山―白

山―中の川(桑原らと)

一九三〇年六月 小川路峠―遠山川西沢渡

―青崩峠

一九三〇年八月 千頭―寸又川廻行―光岳

―信濃俣―田代―大日峠

(工榮らと)

一九三二年八月 金木戸―双六谷―九郎右

衛門沢―黒部乗越―雲ノ

平―奥のタル沢―薬師沢

―有峰

一九三二年七月八月 カラフト行き、敷香

―幌内川―池田―クルタ

マ川廻行―沖見山―ムイ

ガ川―半田沢(今西、西

堀、高橋らと)

一九三三年三月 沖の山、東山

一九三三年八月 小川温泉―朝日―赤男の

コル―蓮華温泉

一九三五年七月 和田川―有峰―薬師―別

山乗越

一九三五年一〇月 立山温泉―真川―折立

峠―有峰―大多和峠

一九三七年三月 精進―御庭―富士山(今

西、西堀らと)

一九三七年三月 面河より石鎚山―穴吹―

剣山

一九三七年四月五月 村所―米良川―上権

原―大タルミ―下屋敷―

水上峠―韓国山

一九三七年六月 恵那山

一九三七年七月 大無間山

一九三九年八月 朝日鉱泉―朝日岳―針生

平―長者原―飯豊山

一九三九年一〇月 真川―岩井谷―太郎平

―有峰―大多和峠

(\* 文献五では今西は一九二六年として

いるが、田中の記録が正しい。三高山岳部報

告第四号で確認)

三〇歳過ぎから登山をはじめ、以後三〇年

間ほとんど毎年のように登山を続けたことが

わかる。現在とは比べものにならない交通機

関や山小屋などの不便さを克服して、これだ

けの山歴をこなし田中の活躍に頭の下がる

思いである。たとえば一五年の白馬行きのと

き、京都を夜行で出発、翌日は大町泊(大糸

線はなく、馬車を使う)、翌日馬尻岩小屋、

次の日に登頂という行程である。

田中はその山行に、宇治長治郎や大西又

吉、竹沢長衛など、いつも優秀な山案内人

をつけていった。この山歴からもわかるが、田

中は岩登りにはあまり興味を示さず、黒部や

双六など、また尾上郷川や寸又川などの初廻

行など、谷歩きを好んだ。(文献三―五)

田中は今西らAACKの連中とよく山に行

っているが、体力の点で衰えを見せなかつた

だけでなく、その精神においても若々しかつた。

今西は言う、どんな話題にも仲間入りさ

れ、お年寄りがあるので煙たいという感じを、

一度だつて我々に抱かせたことはない、どこ

からとり入れられるのか、新しいことになか

なか精通しておられた、登山の服装もいつで

も上から下まできちんとした英国ごのみのス

タイルであった。(文献一)

三、田中のスキー

一九一八年、田中は我が国ではじめてスキーで上高地入りをした。一九二三年には桑原らと仙丈岳積雪期初登頂も行ったが、このときスキーでしかも一本杖で行っている。このように田中の山歴をみるとスキーを使った登山が多いが、田中はスキーを京都二中の中山再次郎校長に習った。中山は高田中学校の教師を勤めたことがあり(文献六、一〇)、一九一一年レルヒ少佐の講習を受けた。中山が関西のスキーの草分けとなり、伊吹山をゲレンデとして開拓した。そのほか、大江山、マキノ、花脊、比叡山、愛宕山などのスキー場の指導をした。田中は中山の最初の生徒であり、そして中山を中心とした関西スキー倶楽部の重鎮であった。倶楽部のメンバーには下



後列 四手井千鶴子 今西 竹沢長衛 田中  
本野正一 西堀  
前列 四手井 高橋

村大丸社長や木原均などがいた。上記の上高地入りはこの関西スキー倶楽部の連中を率いたものであった。田中はスキーを登山の道具として使うという当時としては画期的な先駆者の役割を果たした。ただ田中はあくまでも一本杖であり、師の中山が二本杖にかえても、最後まで一本杖で押し通した。(文献六、七)

#### 四、ヒマラヤ計画

田中は独学で英語を勉強し、アルパインジャーナルを取り寄せてよく読んでいた。勉強家であった。ヒマラヤ関係のところには、赤い鉛筆であちこちにアンダーラインをつけてあったという(文献八)。だからA A C Kが一九三一年五月に創設され、その最初の目標



後列 竹沢長衛 田中 今西  
前列 四手井 西堀 千鶴子(鈴鹿を抱く)  
本野正一

をカブルー(七三三八m)においたときも、田中は大いに賛同し、このとき当座の資金に三〇〇〇円を寄付した(総費用五万円)。當時家一軒が買える額である。それを留守部長の桑原武夫が住友銀行京都支店に預けるが、そのとき「京大ヒマラヤ遠征隊」という名義を怪しんで、窓口で聞き返された。そのときの喜びはいまも忘れない、とそのときの高揚した気分を書いている(文献九)。しかしこの計画は同年九月に勃発した満州事変のために実現しなかった。

カブルー計画が挫折した鬱憤を今西らは一九三二年のカラフト行きではらす。メンバーは今西の他、西堀栄三郎、高橋健治、四手井綱彦、田中、竹沢長衛であった。帰途八月十七日、札幌で当時北大に勤めていた四手井家を訪問したときの珍しい写真を別に示す。なおここで本野は北大の学生であった。(本野正一は会員本野亭一の弟)

一九三四年の白頭山遠征をはさんで、再びA A C Kはヒマラヤへ動き出した。田中も最初から計画に参画した。目標をK2におき、伊藤愿をインドに派遣したが、その費用は田中と奥貞雄のカンパによるものである。この計画が日中戦争で流れたときの田中の失望は大きかった。ヒマラヤ行きを決定したA A C K総会の際の写真が文献一〇にあるが、黒い着物で前列に座っているのが田中である。(なお同書266頁の田中の生年月日は誤り)

因みに横有恒のアイガー東尾根の初登攀は一九二一年(今西が三高に入学した年でもある)、立教大学のナンダゴットは一九三六年

である。まさに近代アルピニズムが我が国ではじまる時であり、田中の活躍もこれと無縁ではなかった。

## 五、その他

田中は戦争が激しくなってきた一九四三年一月、腸チフスのために急逝された。ウタ夫人は一九六八年三月に亡くなっている。なお田中の弟は豊蔵（一八八一年生）、喜作（一八八五年生）といい、豊蔵は東洋美術、日本美術、喜作は西洋美術、日本美術で有名であり、昭和一〇年頃の岩波書店発行の「画説」に数多く発表し、一九一四年には美術店「Galeri Tanaka」を東京で開いている。また二人にはそれぞれ「日本美術の研究」（豊蔵）、「初期南画の研究」（喜作）など著作も多い。喜作は〇八年には梅原龍三郎とともに渡仏しているなど、文化面での貢献も大きい。

田中の長男喜一郎が早世し、次男俊一（〇四〇九二）が後を継ぐ。俊一は静岡高校から京大にすすみ、フランス文学を専攻し、閑学を経て京大教授になる。俊一の長男峻（タカシ）（二八年生）は島津製作所に勤務後、今は伏見で悠々自適の生活をしている。洛北高校では今西皆子と同期であった。この取材のために斉藤清明とふたり、ご自宅を訪ねた。俊一が当時はめずらしい八ミリ映画を撮っている。昭和の初期の貴重な映像をたくさん残っていたが、それを復元したビデオを見せてもらったが、圧巻は伊吹山で田中が一本杖でスキーをしているところである。当時の鴨川、植物園、八瀬遊園地、琵琶湖、伊吹山なども

映像に残されている。田中は常に背骨をのびし、帽子をかぶり悠然とステッキをつけて歩き、その姿は、まさに英国風紳士であり、よき時代の裕福な京のどんな衆を彷彿させるものである。ちなみに昔のフィルムを復元するのは破損するおそれもあり、かなり難しいが、映像プロデューサー吉岡博行氏によって復元がなったという。（NHKで一部紹介された）。なお田中の六男の洪五（一九〇四）は、梅棹忠夫と京都一中で同期である。

## 謝辞

今回田中をとりあげるに当たって調査を開始してから、今西武奈太郎さんから、JAC静岡支部の長田義則さんが田中喜左衛門研究家であるとお聞きした。早速氏に連絡を取り、多くの資料の提供を受けた。長田氏の資料がなかったら、この稿はできなかつたであろう。厚くお礼申し上げます。また田中の孫にあたる田中峻さんにはいろいろとご教示賜った。四手井靖彦さんには貴重な写真の提供を受けた。以上の各位にお礼申し上げます。

## 文献

- 一）今西・田中さん、山と探検、文芸春秋社、二九七〜三〇一、昭和四五年
- 二）今西・田中さんの登山記録、登山（朋文堂）、第七号、昭和三四年
- 三）工楽・寸又川遡行、山岳、二六、二号、一五〇〜一五五、一九三二
- 四）桑原・尾上郷川と中の川、山岳、二五、第一号、五四〜七一、一九三〇

- 五）今西・初登山、ナカニシヤ出版、一八〇〜一八三、平成六年
- 六）小竹・スキーと中山先生のこと、登山、第八号、昭和三五年
- 七）今西、西堀・三高時代の思い出から、山岳、八〇、一九八五
- 八）桑原・京都における近代アルピニズムの曙、山岳、八三、一九八八
- 九）桑原・解題、今西錦司全集、第三卷、講談社、昭和四九年
- 一〇）今西編・ヒマラヤへの道、中央公論社、昭和六三年

## ボリビア・アンデスの山旅

（その二）

阪本 公一

### 五、ボリビア・アンデス最高峰サハマ六五四二m登山

第一次高度順応期間の観光が終わって、いよいよサハマ登山だ。

六月二三日、標高三七〇〇mのラパス市内から空港のあるエル・アルト市に上がり、四〇〇〇mから四二〇〇mの見渡す限り広大な起伏の少ない砂漠地帯を南に向かってランドクルーザでひた走りに走る。荷物の一部は牽引車に積み込んだ。アメリカのアリゾナの砂漠地帯に似た感じだ。途中で車を停めて、ピクニック。約五時間ほどでサハマ村に着いた。意外と雪の少ないサハマの西壁が目飛び込

んでくる。サハマと相対するように、広大な砂漠地帯の平原の向こうに、富士山に似たパリナコタ(六三三〇m)とポメラタ(六二二二m)の二峰が肩を並べて聳えている。

サハマ村は、標高四二〇〇mの平屋建の小さな家が点在する静かなひなびた村だ。サハマ国立公園と書いた看板のある、平屋建の公園事務所で登山届け。お隣の平屋建の瀟洒なロッジが我らの宿。ガイドのハビエル、コックのヘリカ(女性)と運転手のアントニオが我々の同行者。

ロッジの裏にリヤマの群れが草をはんでおり、その向こうにサハマ西壁が威圧的な姿を見せる。

四時頃より、一人でぶらりとサハマ川に釣りに出かけた。割と小さな浅い川だが、水は澄んでおり、いかにも鱒がいそう。川の畔で村の少年三人に出会う。私の岩魚釣り用の継竿が珍しいのか、少年達がついてくる。今は乾季で水量が少なく、小さな鱒しかいないが、一二月からの雨季になると水かさも増え大きな鱒が釣れると言う。そんなことを片言のスペイン語で話をしていたら、私の竿に二五cm位のニジマスがかかった。岩魚竿を使い毛針で釣っている私に、少年達は非常に興味を持ったようだ。三人の少年達は、ずっと私の後をついてきて釣りをしている。一人の一番大きな少年は帰ってしまったが、一五歳のルイスと言う少年と八歳のクリスチャンは、熱心だ。

クリスチャンが、「その竿を売ってくれない。いくらなの。」と執拗に話しかけてくる。

クリスチャンの目は輝き、実に素直そうな子供だ。「この竿は売れないけれど、小さな竿ならプレゼントしても良いよ。」と私は答えた。ルイスとクリスチャンがロッジまでついてきたので、日本から持ってきた少し短めの岩魚竿に、ナイロン・テグスで毛針のセットを作ってやり、クリスチャンに進呈した。嬉しそうにニコッと笑う、可愛い顔。まるで孫のような気がする。翌日の夕方四時に、サハマ川と同じ場所ですれ交わすことにした。

六月二四日、ヒスカ・ワイナポトシの麓の標高四五〇〇m近辺にある間欠泉へ遠足。リヤマ、ビクニーヤの群れが、広大な平原に幾つかのかたまりとなって草を食べている。ロッジからはサハマの西壁しか見えなかったが、歩くほどに、我々の登路となるサハマ北西稜が見えてきた。サハマは、予想していた以上に手強そうな山だ。ガイドのハビエルは「大丈夫、登れますよ。」とこともなげに言う。ここの間歇泉は、イエローストンのように水蒸気を空高く吹き上げるものではなく、温泉の源泉みたいなものが、川の横にあちこちから涌きだしているだけだった。ビクニーヤの群れが走る。ビクニーヤの肉は美味で、キロあたり四〇〇ボリビア(約五六〇〇円)もするという。リヤマ一頭と同じくらいの値段そう。

今日のハイキングの往復約六時間は、結構楽しく退屈しなかった。今日の最高到達点は、高度約四五〇〇m。

夕方四時に、私はサハマ川へ。クリスチャンが向こうから手を挙げて呼んでいる。

Abuelo Japonés(日本人のおじいさん)とさげんんでいるようだ。彼はだいたい前からきて釣りはじめていたらしい。小さなニジマスを手を持って「僕が釣ったんだよ。あげるから貰ってよ。」と私の手に鱒を渡してくれた。私とその日の成果は、一五cm程度の小さな鱒二匹。クリスチャンからのプレゼントと合わせて合計三匹。六月二九日にサハマ峰からおりてくるから、又会おうねとクリスチャンと約束を交わした。

六月二五日、BCに上がる日だ。車で、サハマ川の上流に沿って暫く上がり、車止めまで。そこからは、ラバにより、BCまで荷物を運ぶ。割と傾斜の緩い丘陵地帯のようなんだらかな登り。サハマの西壁がだんだんと大きくなる。リヤマやビクニーヤの姿も見られる。約三時間と聞いていたが、二時間強でBCへ。西壁の真下のただびろい砂の盆地がBCだ。こんこんと湧く泉のそばに、幕営。

正面にサハマ西壁が見える最高の場所だ。しかし、風が吹くと砂が巻き起こり、私たちの衣服はみるみる砂で真っ白。テントの中まで砂だらけで、その日以来、砂をかんで動かなくなったファスナーとの格闘が連日つづいた。最後には、私の寝袋のファスナーも壊れてしまう始末。サハマとは、Sand Beach(砂浜)サハマ)の意味だとの珍説も出てきた。

六月二六日、五七〇〇mのハイキャンプ(Campo Alto)まで高度順応の為に日帰りハイキング。体調の良い宮川ふみ江さんは、BCにて休養。

ルートは西壁の下を大きく左の方に巻い

て、北西稜の肩にでる。BCの前の、ものすごく広い西壁直下の砂の広場からならかな丘陵に登ると、その上が更に広い台地になっており、どんどん左に回りこんで最後に急な斜面を登ると、北西稜に突き上げる。高野さんは、約五四〇〇mの肩から引き返すことになった。

肩からも、北西稜は全く雪がついておらず、がら場の急な斜面。ガイドのハビエル、宮川清明さん、朝倉英子さんと私の四人は、黙々と登るが、風が出だした。北西稜の上に大きな岩壁が二つ立ちはだかっているが、踏み跡は左の方にトラバースしており、左側の大きな岩を回り込んで、不安定なザラ場の急峻なガリーを登る。強風に吹き飛ばされそうになり、ストックで対風姿勢をとりながら、一步一步登る。ガリーを登りきって少し行くと、急な斜面を削って作った鳥の巣のような石組みのハイキャンプ。四〜五張りは張れそう。BCをでて四時間二五分だった。

ハイキャンプから上は、しばらくはガラ場がつづいており、稜線に立ちはだかる岩壁の西壁側に回り込むようにトラバースして、西壁のクローワールを七〇〜八〇m登って北西稜の稜線に戻るのがルートらしい。氷壁となったクローワールはかなり手強そう。下りは早く、約二時間でBCにおりた。

六月二十七日、休養日。BCの夜明けは朝七時頃。気温はマイナス一〇度前後。川は見事に氷結しているが、泉は凍ることなく、こんこんと湧きでている。

朝倉さんは、クローワールの登攀に自信がないからと、頂上アタックを断念するという。残念だが、本人の意志を尊重せざるを得ない。ガイドのハビエルとクライミング・ギアアの点検と打合せ。ハビエルは人柄が素晴らしい五〇歳くらいの国際ガイド。しかし、英語は殆ど喋れず、私の片言のスペイン語とチョボチョボ。ドイツからの登山者が多いらしく、ドイツ語は少しは喋れる。彼との意志疎通がうまく行かず、昔ドイツに滞在されていた高野さんに、通訳して貰うことがしばしばあった。

風が吹くたびに、砂煙が巻き上がり、テントの中で砂だらけ。乾燥しているためか、手もザラザラに荒れてきて、髪の毛の中も砂だらけ。「緑の草原の中のテント地だったら、申し分ないのだけど・・・」と誰かが愚痴をこぼす。コックのヘリカの料理は、なかなか美味しい。日本人好みに、薄味にしてくれ、いろいろ工夫をして毎日違ったメニューが出てきた。

六月二十八日、いよいよアタックにでるべくBCを一〇時に出発。ガイドのハビエル、そして今日BCに上がってきたアシスタント・ガイドの地元のマリオ、そして宮川清明さんと私の四人。ハイキャンプまでは二回目なので、もう少し早く登れると思ったが前回より、僅か三〇分ほどしか短縮出来ていなかった。

午後四時過ぎに、早めに夕食。スープとスパゲッティ。結構美味しかった。ハルシオン一錠をのんで、午後五時頃就寝。二三時起床。

それほど寒くない。

六月二十九日、〇時過ぎに朝食。テルモスに紅茶を詰めて貰い、一時〇五分出発。三〇分ほど、ガラ場を登り、雪が出始めたところでアイゼンをつける。阪本とガイドのハビエル、宮川さんとアシスタント・ガイドのマリオがアンザイレン。コンティニユアスで雪稜を三〇分ほど登り、サハマ西壁の方へ右へ氷壁をトラバース。傾斜四〇〜四五度くらいはクローワールを、ガイドのハビエルが、アイス・スクリューとスノーバーでアンカーをとり、五〇mロープで二ピッチで登り切る。セカンドの阪本は、ダブル・アックスであえぎながらフオロー。傾斜がきついので、息があがる。宮川さんとマリオは、別のロープで後続。

クローワールを終えて稜線にでるも、厳しい岩稜がつづき、引き続きスタカットで三ピッチ。暗やみの中をヘッドランプで登攀しているが、意外と時間がどんどんたつてゆくようだ。コンティニユアスで歩ける、傾斜のやや緩くなった雪面にでたのが朝四時半〜五時頃（高度は多分六一〇〇m前後）。

この頃より、私の腹の調子が非常に悪くなり、二度も大便（強烈な下痢）。傾斜のやや緩くなった安全な場所が出てくるまで辛抱して、ハーネスをはずしメイン・ロープもほどこいて用便をすませ、又ハーネスとロープをセットするのは一仕事だった。この間に、宮川パーティに、先に行つて貰う。

歩きにくいペニテントの広い斜面がつづき、その向こうに頂上への雪面が見える。ここからはそれほど危険な箇所もなく、広い斜

面をしゃにむに歩くのみと思うも、私のペー  
スは極端に落ち、亀のように遅い。ガイドの  
ハビエルに何度かロープで引っぱられるが、  
「チョット待って」と息入れないと足が前  
へ出ない。宮川パーティは、ペニテントの斜  
面のだいぶ上まで行っている。三〇分ぐら  
いの差がついているだろう。

六三〇〇mぐらゐと思われる地点で、嘔吐  
時間は七時二〇分だった。頂上まで後どのく  
らいかハビエルに訊く。「最低二時間くらい」  
との返事。

宮川さんとは、熟年登山者の安全登山・安  
全下山の為に「タイム・リミットは一〇時に  
しましょう。」と取り決めていた。宮川さん  
と無線で交信。「宮川さん、私の調子は悪い  
ので、とても一〇時までにはピークには行け  
そうにありません。ここで断念します。宮川  
さんは、一〇時を期限に、登頂を目指して下  
さい。しんどいでしょうが、頑張つて、よろ  
しく。」と伝えた。

「了解」との宮川さんの返答。宮川さんは  
私より三〇分以上も先行しているし、高所に  
強い彼のことなら、きつと頂上に立つてくれ  
るだろう。

頂上を目前にして撤退することは非常に残  
念だが、家内と約束した「安全登山」を潔く  
実行することに何かしら爽やかな気持ちにな  
る。もうちよつと頑張つたら良いのと思つ  
ているのだろうか、ハビエルは怪訝な顔をし  
ている。

「ハビエル、降りよう。」とうながす。でも、  
下山でも足は重い。途中何度か、嘔吐。岩稜

のあたりで眠くなり、座り込んでウトウト。  
「こんなところで寝込んだら、クローワールの  
氷壁は降りられないぞ。」とガイドに尻をた  
たかれ、ヘロヘロになって急傾斜の氷壁を降  
りる。怖いと言う感覚は全くなかったが、私  
がスリップすれば、西壁の下のBCまで標高  
差一〇〇m以上、二人とも滑落していたで  
あろう。

五七〇〇mのハイキャンプに着いたのは一  
二時前。強烈に咳き込んで、何度も痰を吐い  
た。頂上直下で登頂を断念したのは大変残念  
だったが、私自身は典型的な高度障害の兆候  
だと判断していたので、登頂を断念し撤退を  
決断した自分の判断は、正しかったと今も思  
っている。

宮川さんは九時五五分に見事にサハマ頂上  
に登頂、午後二時にハイキャンプに帰着。  
「おめでとう」と、宮川さんとガッチリ握手。  
宮川さんは、さすがに強い。

テントを撤収し、宮川さんとそろつてBC  
に一六時三〇分に無事下山。出迎えてくれた  
仲間と抱き合つて、登頂の感激に浸つた。

六月三日、BCを撤収し、サハマ村へ下  
山。砂に悩まされたBCだったが、去りがた  
い気持ちになる。振り返り振り返りサハマ西  
壁を眺め、なごりを惜しんだ。

午後、サハマ川のほとりにあるHot Spring  
まで汗を流しに行く。少しぬるめだが、正面  
にサハマ峰が見える、最高の野天風呂。勿論、  
脱衣場もない、全く素朴な天然の野天  
風呂。苦勞したサハマ峰六五四二mを仰ぎみ  
つつ、缶ビールで乾杯。旅の喜びをかみしめ

る至福のひとつときであった。

もう一日サハマ村に滞在する予定であつた  
が、ゆつくりシャワーを浴びたいとの意見が  
多数で、明日ラパスに戻ることにした。

七月一日、サハマ村に別れを惜しんでラパ  
スへ。出発前に、ロッジに黒い毛糸の帽子を  
かぶり、水色のセーターを着た少年が訪ねて  
きた。以前会つた時と違う色の服を着ていた  
のですぐに解らなかつたが、クリスチャンだ。  
私も紺の厚手の羽毛服を着ていたので、彼も  
すぐに私と気がつかなかつたようだ。「クリ  
スチャン？」と尋ねると、ニコリとうなずく。  
昨日の夕方サハマ川で再会しようと約束して  
いたが、温泉に行つていて約束を果たせなかつ  
た。約束の時間に来ない私が、山で遭難で  
もしたのではないかと心配して、八歳のクリ  
スチャンがロッジの様子を見に来てくれたよ  
うだ。本当に愛しい子供だ。「クリスチャン、  
有り難う。」を思わず彼を抱きしめ、頬ずり。  
記念の写真を撮つて、おやつをプレゼント。  
「ムーチャス・グラシヤス」とニコツと笑つ  
たクリスチャンは、切り替えギアアをついた  
マウンテン・バイクに乗つて去つていった。  
何年後に、ボリビアの孫「クリスチャン」  
に再会する機会はあるだろうか？

## 六、エピローグ

今回の山旅では、高度順応は非常にスムー  
スに巧くいっていると思つていた。又、私自  
身の体調も非常に良かった。なぜ、頂上アタ  
ックの日に突然調子が悪くなつたのか解らな  
い。ハイキャンプにあがる前日の夕食に、チ

## ボリビア・アンデスの山旅、日程等

2005年

月	日	曜日	行程	宿泊場所
1	6	10	金 伊丹/08:40 - 成田/09:50 JL3002	
			成田/18:10 - ダラス/15:35 AA060	
			ダラス/17:23 - マイアミ/21:15 AA905	マイアミ宿泊
2	11	土	マイアミ/23:20 AA922	機中泊
3	12	日	サンタクルス/06:30 AA922、サンタクルス/8:20 - ラパス/9:20 Lloyd ラパス	3,650 m (一番ホテル)
4	13	月	ラパス - コロイコ	コロイコ 1,730 m (Viejo Molino Hotel)
5	14	火	コロイコ - ラパス	ラパス 3,650 m (一番ホテル)
6	15	水	市内観光 (市場、サンフランシスコ寺院、博物館、月の谷)	ラパス 3,650 m (一番ホテル)
7	16	木	市内観光 (徒歩)	ラパス 3,650 m (一番ホテル)
7	17	金	ティワナク遺跡見学	ラパス 3,650 m (一番ホテル)
8	18	土	ラパス - コパカバナ (Copacabana)	コパカバナ 3,890 m (Hotel Gloria)
9	19	日	チチカカ湖の太陽の島ハイキング (4,200 mの尾根、6時間)	コパカバナ 3,890 m (Hotel Gloria)
10	20	月	コパカバナ - ラパス	ラパス 3,650 m (一番ホテル)
11	21	火	ラパス - チャカルタヤ 5,395 m - ラパス	ラパス 3,650 m (一番ホテル)
12	22	水	休養	ラパス 3,650 m (一番ホテル)
13	23	木	ラパス - サハマ	サハマ 4200 m
14	24	金	サハマ - 間欠泉 4,500 m - サハマ (約6時間のハイキング)	サハマ 4200 m
15	25	土	サハマ - Campo Base	BC 4700 m
16	26	日	BC - Campo Alto 5,700 m - BC	BC 4700 m
17	27	月	Rest day	BC 4700 m
18	28	火	BC - Campo Alto 5,700 m	高所キャンプ 5,700 m
19	29	水	Campo Alto - Sajama 6,542 m - Campo Alto - BC	BC 4,700 m
20	30	木	BC - サハマ村 - Hot spring - サハマ村	サハマ 4200 m
22	7	1	金 サハマ - ラパス	ラパス 3,650 m (一番ホテル)
23	2	土	ラパス市内観光と買い物	ラパス 3,650 m (一番ホテル)
24	3	日	ラパス市内観光と買い物	ラパス 3,650 m (一番ホテル)
25	4	月	ラパス/6:38 - マイアミ/15:33 AA922	マイアミ宿泊
26	5	火	マイアミ/09:10 - ダラス/11:04 AA523	
			ダラス/11:55 AA061	機中泊
27	6	水	成田/15:05 AA061	
			成田/17:55 - 伊丹/19:10 JL3007	

### 1) Ichiban Hotel

Av. Landaeta 730, Eduardo Berdeciao, Alto San Pedro, Bolivia  
 Tel : 248-7091 (日本から0033-010-591-2-248-7091)  
 Fax : 247-7222 (日本から0033-010-591-2-247-7222)  
 Email : kentngm@accelerate.com  
 登山情報に詳しい南雲さんの経営するホテル、ソボチカ地区に有り。

### 2) Embajada del Japan (日本大使館) Calle Rosendo Gutierrez 497, Sanchez Lima, La Paz

Tel : 241-9110, 241-9111, 241-9112, 241-9113

### 3) Sociedad Japonesa de La Paz (日本人会館)

Batallon Colorados esq. Federico Zuazo, La Paz  
 Tel : 235-2294

### 4) 旅行代理店 :

Colibri Srl  
 Mr. Oscar Sainz  
 Alberto Ostría/Juan Manuel Caceres No 1891 4to PISO 4B  
 Tel : 00 591 2 2423246  
 Fax : 00 591 2 2423247  
 Casilla Correo : 7456 La Paz, Bolivia  
 E-mail : acolibri@ceibo.entelnet.bo

### 5) Holiday Inn Miami International Airport North :

1111 S. Royal Poinciana Blvd., Miami Springs, FL 33166, USA  
 Tel : 305-8851941, Fax : 305-8834744  
 マイアミ国際空港の北東2 km、空港より2 4時間フリーシャトル有り。

キンの油料理と、バナナの油で揚げたデザートがでた。夜中に随分と胸やけがしたので、消化剤を飲んだ。ハイキャンプへ出発の朝、クシャミがでて鼻水が出てきたので、風邪薬を飲んだ。ハイキャンプで、翌早朝のアタックに備えて、夕方早く就寝するためにハルシオンをのんだ。ハイキャンプでの夕食、朝食は通常通り美味しく食べた。

今回の私の急激な体調異常は、薬と何か関係があるのだろうか？ それとも単に消化不良乃至は胃腸障害なのだろうか？ 下痢、嘔吐、咳、痰などの症状から判断して、高度障害の兆候と私は判断したのだが・・・。

今回のポリビア・アンデス登山に備えて、昨年夏から、相当ハードなトレーニングを積んできたつもりであったが、やはり年齢による体力の衰えは隠しえず、それが基本的原因であったのかもしれない・・・。

今回のポリビア・アンデス山旅では、ラパス一番ホテルの南雲さんには大変お世話になった。奥様、お嬢様、御子息と一家あげての家族的な心暖まるご親切なアテンドで、我が家にいるような気持ちでラパスでの滞在を楽しく過ごすことができた。心から御礼を申し上げたい。今後ラパスに行かれる方には、安心して気持ちよく泊まれる「一番ホテル」を是非利用されるように強くお奨めしたい。

以上

## 第九回「岡山のを登る会」 (駒の尾山・船木山・後山の山行記録)

潮崎 安弘

今年の岡山のを登る会は、去る一〇月二十九及び三〇日に開催された。この会は九七年岡山の名峰那岐山の山行から始まり当初は日帰りであったのが、今では麓の温泉に泊る二日の行程、参加者も毎年二〇名以上の盛況な山登りと語らいの会に成長した。その頃の状況は〇一年一月発行本誌の「第四回岡山のを登る会―川崎徹」で報告されている。

その後、年一回の開催で今年は数えて第九回、参加者は等しく五歳年上の高齢となったので、今年の計画では次の点に留意した。

- ・ いずれ、高齢化で車の長距離運転は避けるべしとの認識に立って、岡山への行帰りは原則公共交通機関利用として最寄の駅に集合。山へのアクセスは地元で専用バスを調達する。

- ・ これに伴って下山は入山と同一場所である必要がなくなるので、縦走形式を採用する。
- ・ 参加者夫々の体力に応じて緩い本計画と余力がある人のためのオプション計画を用意。

挑む山は、兵庫県との県境に連なる駒の尾山（二二八一米）から船木山（二三四四米）を縦走、オプション計画としては船木山から後山（二三四五米）の往復とした。

かくして恒例一〇月最終の週末、斎藤惇生・中島道郎・井上潤・寺本巖・平井一正・

青野敏幸夫妻・酒井敏明・左右田健次・松井敦男・藪内卓男夫妻・新井浩夫妻・内山敬康・川崎徹夫妻・高村泰樹・川嶋眞生・潮崎安弘・高野昭吾・井関祥浩・宝田克男・野村悦夫・福嶋義宏（敬称略、以下同じ）、計二十五名の参加をえて、山行がスタートした。以下はその山行記録である。

一〇月二十九日、朝からの雨も小止みになった午前一一時四〇分、大部分の人が乗る特急白兔が遅延のため四〇分遅れで、智頭急行（JR山陽線上郡と因美線智頭を結ぶ三セク線）大原駅に全員集合。直ちに現地調達の専用バスで若杉原生林登山口に急行した。第一日は足馴らしのため、昼食をはさんでの約三時間のトレッキングである。この地は樹齢三〇〇年近いぶな・檜・楓・橡・杉など、植林を入れな  
い保存原生林で、林間に作られた遊歩道を歩きつつ会話を楽しむ事が出来た。午後三時半には登山口に帰着。帰り



道、古代製鉄に造詣の深い川崎の案内でタラ遺跡と天野屋利兵衛隠住跡を見学、四時半には今夜の宿場の粟倉温泉「あわくら荘」に入浴後は斎藤Yさんの挨拶により夕食開始。その後は例によって川崎持参の赤穂名産しゃこを肴に酒盛りが深夜まで続き、井関、野村の元鉄屋に川崎が加わっての鉄談義や、本誌に掲載中の平井によるAACK人物抄が今年の特別な話題であった。

一〇月三〇日は予想通り朝から晴れ、午前八時半バスで宿を出発し駒の尾山登山口着は九時。折から色付き始めた林間の坂道を、カサカサと落葉の音を立てつつ歩く風情は秋そのものである。緩やかな尾根道をたどる内に、一〇時半頂上に到着。全員で記念撮影の後、後山まで歩く組が先発した。早歩きで一時間過ぎ船木山通過。後発隊は県境尾根をのんびり歩いたが船木山着では僅か一〇分の遅れ、それではと藪内とご夫人三名が後山へと先発隊を追い駆けた。先発隊は後山山頂一二時着、後発の追い駆け組も追い付いて全員一六名で岡山県の最高峰、後山からの眺望を楽しんだ。船木山に戻り後発隊と合流、昼食を終えたものから二組に分かれて下山。急な坂道に膝の負担に耐えつつ、午後一時半過ぎには全員下山、出迎えたバスで再び「あわくら荘」へ帰りついた。温泉で汗を流した後、解散前のピールの乾杯。これも公共交通機関利用の余得か。予定のコースを踏破した満足感に座は大いに盛り上がり、最後に中島ドクターから、「六五歳を過ぎたら、山中での転倒防止のためストックは二本使用を推奨」とのご発言を

最後に、来年の再会を約して解散となった。なお九一年一月梅里雪山で遭難した会員船原尚武くんのご両親が今回の集合場所である大原にお住まいであったので、全員が集合する時間までに斎藤他関係者が実家にお参りすると共にご両親をお慰める機会を持つことが出来た事、我々からも心ばかりのお供えをどけて貰った事、翌日解散後も平井他が再度訪問、その日が奇しくも尚武くんの誕生日であった事を付記する。

さて皆さん、現在のこの会の世話役は寺本幹事長を中心として川崎・高村・潮崎が当たっています。来年も一〇月に第一〇回を予定しておりますが、今後ご案内などメールをご希望の方がおられればご連絡先アドレスを寺本までお知らせ下さい。多数の新たなご参加を歓迎致します。

寺本連絡先 teramoto@c.oka-pu.ac.jp

二〇〇五、一〇、一四 潮崎記

## 日本山岳協会・山岳共済 (一般共済)の案内

(事務局 吹田啓一郎)

日本山岳協会が実施する山岳遭難共済制度への次年度の加入方法などについてのご案内です。山行中の疾病が原因の遭難捜索費用も原則支払われるようになった点が変更されました。それ以外の点は本年度と同じです。加

入を希望される方は次の要領で手続きを行って下さい。山岳共済の条件として加入者は所属山岳会へ登山計画書を提出することが義務づけられています。

### 一、山岳共済の種類

国内山行を対象に五種類の基本タイプが用意されており、さらに入院・通院補償と海外山岳共済の二種類の追加オプションがあります。

(一) 基本タイプの保険金額と会費は次の五種類です。

(二) 入院・通院補償

会費は四〇〇〇円の追加です。保険金額は一日につき入院三三〇〇円、通院一〇〇〇円です。

(三) 海外山岳共済

会費は一〇〇〇〇円の追加です。保険金額は死亡後遺障害一〇〇万円、救済者費用五〇〇万円、個人賠償責任一億円です。

(四) 期間は毎年四月一日から翌年四月一日午後四時までです。中途加入の場合も払込日の翌日から次の四月一日午後四時までで、会費の額は変わりません。

タイプ	会費(年額)	死亡・後遺障害	遭難捜索費用	個人賠償責任
A	5,500円	180万円	200万円	なし
B	6,200円	200万円	200万円	1億円
C	8,000円	300万円	250万円	1億円
D	11,000円	400万円	350万円	1億円
E	18,000円	1,000万円	500万円	1億円

## 二、加入の手続き

加入を希望する方は、必要事項を明記した加入申込書を、AACKの指定する山岳共済担当者（堀内潭様）に提出し、指定の銀行口座に会費を振り込んでください。

(一) 加入申込書には次の八項目を記入してください。（書式自由）。

- ① 氏名（フリガナ）
  - ② 生年月日
  - ③ 郵便番号と住所（フリガナ）
  - ④ 電話番号、FAX番号
  - ⑤ 電子メールのアドレス（ある場合）
  - ⑥ 職業
  - ⑦ 加入タイプ（A～E）と入院・通院補償、海外山岳共済の追加希望
  - ⑧ 他の山岳保険の加入状況（一般的な生命保険は含まず）
- 担当者の連絡先は次の通りです。できるだけ電子メールでお送り下さい。

(二) 会費の振込口座（申込みと同時に振り込んでください）

(三) 担当者が山岳共済事務センターへ加入申込みと会費の振込みを行います。この振

込日の翌日から保険は有効です。振込の翌月に日本山岳協会より一般共済会員証がAACK担当者に送付されてくるので、担当者から本人に回送します。

三月一五日までにAACK担当者へ申込みと会費振込をしていただければ、四月一日から有効となるように手続きします。

## 三、加入者の山行・登山計画書の提出

加入者は山行時に次のことを守って下さい。

(一) 山岳共済の適用を受けるには、日帰りハイキング以外のすべての山行（沢歩き、岩登り、積雪期の登山、及びすべての泊まりがけの山行）で登山計画書を提出する義務があります。

(二) 登山計画書には次の事項を記入して下さい。

登山目的、日程、ルート、メンバーの氏名・年齢・住所・電話番号、留守本部、最終下山日、共同及び個人装備、食料（実働・予備日明記）

(三) 登山計画書の提出先は阪本様です。できる限りワープロなどで作成したファイル

を電子メールに添付して  
へお送り下さい。できない場合は、左記の自宅へ郵送して下さい。

(四) 下山後、阪本様へ速やかに電話やメールで下山報告をしてください。

(五) 阪本様が担当するのは登山計画書のとりまとめで、留守本部ではありません。留守本部は必ず山行計画者が自己の責任で定めてください。万一の事故発生時の捜索救援体制も、山行計画者が事前に検討しておくべきことであることをご承知ください。

(六) 登山計画書を提出しない方は次年度の加入をお断りします。

(七) 山岳共済に関する疑問点や、更に詳しい説明が必要な場合は、担当の堀内様にお問い合わせください。また、日本山岳協会のホームページにも説明があります。

<http://www.jima-sangaku.or.jp/insurance/index.html>

## AACK海外登山・探検 助成制度の案内

（事務局 吹田啓一郎）

今年度から会員個人の海外登山や探検的な活動を支援する目的で始めた助成制度の来年度の計画募集についてご案内します。海外登山・探検を計画されている会員には奮ってご応募ください。申込期限は二〇〇六年一月末日です。

## 一、申請方法

下記の事項（申請時の予定で構いません）を記した会長（木村雅昭）宛の申請書（A4

紙に五枚以内)を作成してください。送り先はAACK事務局長宛に郵送、あるいはPDFを電子メールでお送りください。送り先

(一) 隊または計画の名称

(二) 申請会員名と連絡先、Eメール等

(三) 隊の構成(氏名、年齢、所属山岳会)

AACK会員外の参加も認めます

(四) 対象国・山域・地域

(五) 概略のルートと日程

(六) 予算

(七) 隊の特徴などのアピール(計画の目的・意義と対象地域・活動内容、準備状況、

隊員構成の関係など)

(八) 助成金の振込先(銀行名、名義、口座番号等)

二、海外登山・探検助成制度 運用規程

第一条 海外登山・探検助成制度(以下、助成と称す)は、バイオニア的ないしオリジナリティのある海外登山や探検的活動の助成を目的とする。

第二条 助成の対象は本会会員が主催する計画とし、申請者は本会会員に限る。助成に際しては審査委員会の審議に基づき、理事会が決定する。

第三条 審査委員は理事会で選出する。委員の任期は二年とし、再任を妨げない。

第四条 助成金額は一件一〇万円を原則とし、年間三〇万円を上限とする。ただし理事会が認めた場合はこの限りでない。

第五条 本規程は二〇〇五年五月一五日の総会の承認を得て施行する。

申し合わせ事項

(一) 助成の決定は原則として年一回三月に行い、予算に余裕があれば九月にも行う。

(二) 助成を申請しようとする者は会長宛に文書により申請し、事後三ヶ月以内に報告書を提出しなければならない。報告書はAACKニューズレターならびにホームページに掲載する。

(三) 一計画につき一申請だけ受け付ける。(文責・事務局 吹田啓一郎)

## 訂正

Newsletter No.36 巻頭三頁下段後より九行目 隊員名の記載中、平井一正隊員のお名前が抜けておりました。お詫びして訂正致します。

## 編集後記

東チベット横断山脈の未踏の峻峰が次々と登頂されていると、横断山脈研究会々長中村保氏からのニュースで知る。東チベットのマッターホルンと呼ばれ、ヨーロッパのそれよりはるかに峻峻な難峰「カジャチオ六四四七m」が、英国のMick Fowlerによって六日間の登攀により初登頂された由であり、四川省

の「夏塞(シアシエ)五八三三m」(平井一正会員がクーラカンリ初登頂の帰路、川蔵公路上から理塘高原の北に「海子山五八三三m」として紹介され、胸を躍らせた。)も、カナダ/NZ隊に初登頂されたという。二〇〇二年四川省・党結真拉(ダンチェツエンラ)峰登山の往復にその雄姿を眺め、また、この山の登山計画を考えられた当会々員もあつただけに、惜しい！と落胆する。田中喜左衛門さんや厳冬期知床山系の縦走をされた先達の記事を読むにつけ、また、崑崙登山報告の中で伊藤寿男会員も述べておられるように、登攀能力の有る人たちの少人数の登山パーティーを、最後のフィールドと言える東チベット横断山脈の山々に送ることが出来ないのだろうか？

今号の発行が遅れましたことをお詫び致します。次号の原稿締切日は二〇〇六年二月一日、発行は三月中旬を予定しています。宜しくお願いいたします。

(田中)

編集委員 田中昌二郎

発行日 二〇〇五年十二月末日

発行所 京都大学士山岳会

〒六二〇〇二 宇治市五ヶ庄

京都大学防災研究所

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一一八

(株) 土倉事務所